

不沈軍艦の見本

——金博士シリーズ・10——

海野十三

青空文庫

1

さて、日本対米英開戦以来、わが金博士は従来にもまして、浮世をうるさがっている様子であつた。

「ねえ、そうでしょう。白状なさい」

と、その客は金博士の寝衣の裾をおさえて話しかけるのであつた。金博士が暁の寒冷にはち切れそうなる下腹をおさえて化粧室にとびこんだたん、扉の蔭に隠忍待ちに待っていたその客は、鬼の首をとったような顔で、金博士の裾をおさえて放さな

いというわけである。

「これこれ、そこを放せ。早く放さんか。一大爆発が起るわ。この人殺しめ」

博士は、身ぶるいしながら、鍋なべのお尻のように張り切った下腹たばらをおさえる。客は、そんなことにはおどろ驚く様子もなく、

「大爆発大いに結構。その前に一言でもいいから博士直じきじき々の談うかがを伺いたいです。すばらしい探訪たんぼうニュースに、やつと取りついたのですからな。さあ白状なさい」

「なにを白状しろというのか、困った新聞記者じゃ」

「いや私は、録音器持参の放送局員です。博士から一言うかがえばよろしい。あの赫々かつかくたる日本海軍のハワイ海戦と、それから

あのマレイ沖海戦のことなんです」

「そんなことをわしに聞いて何になる。日本へいつて聞いて来い。おお、ええ加減に離せ。わしは死にそうじや」

「死ぬ前に、ひとこと一言にして白状せられよ。つまり金博士よ。あの

未曾有みぞうの超々ちようちようだいせんか大戦たいせんこそ、金博士が日本軍に対し、博

士の発明になる驚異きようい兵器を融ゆう通ずうされたる結果であろうという

巷間こうかんの評判ですが、どうですそれに違いないと言いつてくだ

さい」

「と、とんでもない」

と金博士は、珍らしく首筋まで赧あかくして首を振った。

「と、とんでもないことじや。あの大戦果は、わしには全然無関

係じや。わしが力を貸した覚えはない」

「金博士、そんなにお隠しかくにならんでも……」

「莫迦ばか。わしは正直者じや。やったことはやったというが、いく

ら訊きいても、やらんことはやらぬわい。これ、もう我慢がまんが出来ぬぞ、この殺人訪問者め！」

大喝だいかつ一聲いっせい、金博士は相手の頤あごをぐわーんと一撃やつつけた。

とたんにあたりは大洪水だいこうずいとなったという暁あけの珍事ちんじであつた。

というようなわけで、あれ以来博士は、あられもない濡衣ぬれぎぬを

きせられて、しきりにくすぐつたがつている。かの十二月八日の

博士の日記には、いつもの大記載だいきざいとは異ことなり、わずかに次の一行

が赤インキで書き綴つづられているだけであつた。もつて博士の驚きよう

愕^{がく}を知るべし。

「流石儂亦顔負也矣！ 九排日本軍將兵先生哉！」

とにかく愕^{おどろ}いたのは金博士ばかりではない。全世界の全人間が愕いた。殊に最もひどい感動をうけたものは、各国参謀軍人であった。あの超電撃的地球儀的^{こうはん}広汎大作戦が、真^{しん}実^{じつ}に日本軍の手によつて行われたその恐るべき大現実^{おほ}に、爆風の压倒を憶えな
い者は一人もなかった。

（いや、今までの自分たちの頭脳は、あのような現実が存在し得ることを感受するの能力がなかったのだ。今にしてはつきり知る、自分たちの頭脳は揃いも揃つて發育不全であつたことを！ ああ情けなや）

と、彼らの多くは、それ以来すっかり氣力を失つて、右向け右の号令一つ、満足にかけられないという始末しまつであつた。

その後一ヶ月を経へて、彼らはようやく正氣しょうきらしいものに立ち歸つたようである。その証拠には、あれから一ヶ月程してから、彼らはしきりに忙いそがしそうに仕事を始めたことを以て窺うかがうことが出来る。

但しその仕事というのが、ちと奇抜すぎはしないかと思われる種類のものではあつた。彼らは、どこから手に入れたか、机きじょう上に夥おびただしい文献を積み上げて、一々それを熱心に読み且かつ研究を始めたのであつた。

その文献なるものを、ちよいと覗のぞいてみると、曰いわく「世界お伽と

ぎばなし

嘸、法螺博士物語」、曰く「カミ先生奇譚集」、曰く「特

きたんしゅう

へんさん

許局編纂——永久運動發明記録全」、曰く「ジーマンス研究所

こだいもうそうはん

誇大妄想班 報告書第一輯乃至第五十八輯」、曰く「世界瘋癲

しゅないし

びよう

病

患者妄想要旨類聚」、曰く「新青年——金博士行蹟

もうそうようしるいじゅう

きき

しんせいねん

記」、曰く「夢に現れたる奇想集」等々、一々書き切れない。

ぎようせ

この奇妙なる文献の山と、彼らのくそ真面目な顔とを見くらべ

て、もしや彼らが十二月八日をシヨツクとして云いあわせたよう

に気が変になつたのではないかと疑念を抱かせるものがあるので

あつたが、二三の者に小当りに当つてみた結果によると、変にな

ぎねん

つたわけでもないらしい。そして彼らの整理簿の上には、これま

た云いあわせたように、次の如き格言様の文句が見やすきとこ

かくげんよう

ろに大書されてあつた。すなわち、

“世の中に、真に不可能なるものは有り得ず。ナポレオン”

又曰く、

“不可能なるものこそ最も恐るべく、且つ大警戒すべし。フランキー・ルーズベルト”

2

そのフランキー・ルーズベルトであるが、彼は十三月八日（十

三月は誤植ごしよくにあらず、アメリカでは一九四一年の大惨敗だいざんぱいを記念するために従来の如く十二月末日を過ぎても年号を改めることをなさず、その後は一九四一年十三月、一九四一年十四月、エトセトラというが如く同じ年号でつづけていくこととなった。だから十三月というは、歐洲でいう一九四二年一月のことと思えばよろしいのである）——その十三月八日において、彼ルーズベルトは、彼の特使を、かの金博士に面会さすべく遂ついに成功したのであった。

「わしはルーズベルトは嫌いだよ。あいつはわしの大嫌いな人間じゃからな」

金博士は、最初の一撃でもって、特使をごとんとやつつけた――

―つもりであつた。しかし最初の一撃には、既に体験ずみのアメリカ人のこととて、かの特使はくらくらとしながらも首をたて直し、

「そのことはまた別の機会にゆっくり弁明することにしたしまして、ねえ金博士、わが大統領は、博士において今回お願いの一件さえお聴届け下されば、次のアメリカ大統領として、金博士を迎えるに吝^{やぶさ}ならぬといわれるのです。どうです、すばらしいではありませんか、あの巨大なる弗^{ドル}の国の大統領に金博士が就^{しゅう}任^{にん}されるというのは……」

「この上^{シャンハイ}海では、弗は依然として惨^{さん}落^{らく}の一途^{ただ}を辿^{たど}っているよ。今日の相場では……」

「ああ、もうし、ちよつとお待ち下さい。この件を御承諾下さいますならば、シカゴの大屠殺場だいつきつじょうに、新に大燻製工場あらた だいくんせいこうじょうをつけて、博士にプレゼントするとも申されて居りますぞ」

「あほらしい。シカゴは既に日本軍の手に落ちて、自治委員会が出来ているというじゃないか。お前さんは、わしを偽瞞だましに來なすつたか」

「と、とんでもない。ええとソノ、私の今申しましたシカゴというは、元のシカゴではなくて、今回ユータ州に出来ましたるヌー・シカゴのことです。そのヌー・シカゴの大屠殺場に……」

「これこれ、空虚なる条件をもつて、わしをたぶらかそうと思つても駄目じや。もう歸つて貰いましょう」

「空虚というわけではありませんぞ。わが大統領も、全く以て真剣なんです。その証拠には、ここに持つて参りましたる燻製見本を一つ御風味ごふうみねがいたい。これはわがアメリカ大陸にしか産しないという奇獣きじゅうノクトミカ・レラティビアの燻製でありまして、まあ試みにこの一片ぺんを一つ……」

と、特使は、隠し持ったるフォークとナイフを電光石化でんこうせつかと使いわけて、あやしげなる赤味をおびた肉の一片を、ぽいと博士の口に投げ入れるなれば、かねて燻製ものには嗅きゆう覚かく味覚みかくの鋭えい敏びんなる博士のことなれば、うむと呻うなつて、思わずその一片を口の中でもぐもぐとやってみると、これが意外にも大したしろものであった。燻製通つうの博士がこれまでに味わった百十九種の燻

製のそのいずれにも属せず、且つそのいずれもが足許あしもとにも及ば
 ないほどの蠱惑こわくてき的な味感みかんを与えたものであるから、かねて燻製
 には食く意地いじのはつたる博士は、卓子テーブルの上に載っている残りの
 ノクトミカ・レラティビアの肉を一片又一片と口の中に投ほうり込む
 してやったりと、傍かたわらにおいてにんまり笑つたのは、かの特使で
 あつた。このノクトミカ・レラティビアの燻製肉こそは、カナダ
 の国境附近の産になる若鹿わかしかの肉にアマゾン河にいる或る毒虫どくむし
 の幼虫ようちゆうを煮込にこみ、その上にジーイー会社で極超短波ごくちょうたんぱを浴あび
 せかけて、電気燻製とし、空前絶後の味をつけたものであつて、
 この調理法は学者アインシュタインの導みちびき出したものであつた。
 故ゆえにこの燻製肉を一度喰くらえば、あたかも阿片あへんにおいて見ると同じ

まひてきししょうじよう
麻痺的症狀を来し、絶対的人間嫌いが軟化し、相対的人間嫌いと変るといふ文字通り苦肉の策を含んだものであつた。果してその効果がありたると見え、金博士は両眼さえ閉じ呼吸もつかずに、残余のノクトミカ・レラテイビアをフォークの先につきさして喰う喰うわ……。

「そこで金博士。わが大統領のお願い申す一件のことですが、ぜひとも金博士の発明力を煩わして、絶対に沈まない軍艦を一隻、至急御建造願ひまして、当方へ御下渡し願ひたいのであります。お分りですか。つまり、いかなる砲弾なりとも、いかなる重爆弾なりとも、はたまたいかなる空中魚雷なりとも、その軍艦に雨下命中するといえども絶対に沈まない軍艦を

御建造願いたいのであります。一体そういうものが、博士のお力によりお出来になりましたようか」

これに対して、博士の返答は、もとより聞かれなかった。しかし特使は、失望することなく、いやむしろ相当の自信ありげに、金博士が怪^{あや}しき燻製肉ノクトミカ・レラティビアの見本全部を喰べ終るのをしずかに見まもっているのであった。

卓上の一切を平げ終ったとき、金博士は嵐のような溜息を立てつづけに発したことであった。

今までに博士が、燻製肉を喰べて、こんな大袈裟な溜息をついたことは一度もなかった。ということは、恐るべき忌わしき妖毒が、今や金博士の性格を見事に切り崩したその証左と見てもさしつかえないであろうと思う。

「うふふん。じ、実に美味なるものじゃ。珍中の珍、奇中の奇、あたかもハワイ海戦の如き味じゃ。うふふん」

と、博士が暫くめに、感にたえたようなことばを吐いた。

「そんなにお気に召すなら、見本として、もつと持参してまいりましたものを」

「そうじやったなあ。君も特使のくせに、氣の利かぬことじや。尤もアメリカの軍人というやつは……」

「おっと、皆まで仰有いますな。それよりもさつき申上げた不沈軍艦ちんぐんかんの件ですが、博士のお力で、左様なものが出来るでございましょうか。それとも覚束おぼつかのうございますかな」

特使は、わざと博士の氣にさわるような言葉を使う。

「つまらんことを訊くものじやない。この世の中にわしに出来ないものなどは、一つもないわ。不沈軍艦ふしんぐんかんなぞ造ろうと思えばわけはない。十ヶ月の猶予期間ゆうよさえあれば、不沈軍艦一隻、なんの造作うさもなく造つて見せるわ」

と、博士は例によつて、至極事しごくこともなげに言つてのける。

「えええッ」

と、^{ぎょうてん}仰天し、^{きょうき}狂喜したのは、かの特使であつた。

「本当でございますか、それは……あのう、十六吋の砲弾、いや十八吋の砲弾、二十吋^{インチ}の砲弾をうちこまれても沈まないのですぞ」
「砲弾をいくらうちこんでも、一つだつて穴が明^あきはしない」

「えええッ。そいつは豪^{ごう}勢^{せい}ですね。いや砲弾ばかりではない。
空中からして、日本空軍のまきちらす重爆弾が雨下命中したらば、
どうなりますか」

「たとえ幾十発幾百発の重爆弾が落ちてこようとも、あとに一つの穴だつて明かない。絶対に大丈夫だ」

「しかし、このとき空中魚雷^{いだ}を抱きたる日本の攻撃機数十台が押

し寄せ、どどどと、空中魚雷を命中させ……」

「穴は明きません」

「続いて、果敢^{かかん}なる日本潜水艦隊が肉薄^{にくはく}して、数十本の魚雷を本艦の横腹^{よこばら}目にかけて猛然と発射するときは……」

「大丈夫だといったら、大丈夫だ。しかし大統領にこういいなさい。たしかに不沈軍艦一隻——しかも排水量^{はいすいりょう}九万九千トンというでかいやつを造ってお渡しする。しかしわしは、これを金^{きんせ}錢^{せん}づくで作ってやろうというのではない……」

「わかつています。燻製肉の一件……」

「いや、燻製肉の代償^{だいしょう}を欲しているわけでもない。慾心^{よくしん}で、それを造ってあげようというのではない」

「すると全面的に、わがアメリカを援助せられて……」

「自惚うぬぼれてはいかん。とにかくこの代償として、わしはルーズベ
ルト大統領がいつも鼻の上にかけている眼鏡を貰いたい。と、そ
ういつて伝えてくれ」

「えっ、不沈軍艦一隻と大統領の眼鏡との交換だと仰有るのです
か。それは又、慾のない話です。ああわかりました。絵に描いた
不沈軍艦を渡してやろうというのでしよう」

「ちがう。わしは嘘をいわん。真しん正しょう真しん銘めいの九万九千トンの巨
艦だ。立派に大砲も備え、重油じゅうゆを燃やして時速三十五ノットで

走りもする。見本とはいいいながら、立派なものじゃ。あとはそれ
を真似まねて、それと同じものをアメリカでどんどん建造すればよろ

しい。わしを信用せよ」

「ほ、本当でございますか。ほほほつ、それはまた夢のようだ。

すると、やがてわがアメリカは九万九千トンの不沈軍艦を百隻作
つて、太平洋に押し出すのだ。こいつは素晴らしいぞ。では博士、
早速ですがお暇乞いをして、急遽帰国の上、神経衰弱症
の大統領を喜ばしてやりましょう」

特使は、崩れ放しの笑顔を、両手で抑えるようにして、あたふ
たと博士の研究室を出ていった。

月日のたつのは早いもので、早くも、あれから十ヶ月経った。

時正まさに一九四一年二十三月であつた。

ここはワシントンの白聖館はくあかんの地下十二階であつた。その一室の中で大統領ルーズベルトのひびのはいった竹法螺たけぼらのような声をする。

「おい、シモンよ。シモンはいないか」

そこへあたふたと、廊下を走つて、過日かじつの特使シモンが駆けこんできた。

「誰だ。おおシモンか。遅かったじゃないか。まだあれは見えな

いか」

大統領は、せきこんで訊く。

シモンは、しきりに胸^{むな}板^{いた}を拳^{こぶし}で叩^{たた}いていたが、やや鎮^{しず}まったところで、やつと声を出した。

「ああ大統領閣下。何もかも一どきに到着いたしました」

「え、何もかも一どきにとは？」

「はあ、待ちに待ったる新軍艦ホノルル号が突^{とつ}如^{じよ}ニューヨーク沖に現れました。九万九千トンの巨艦ですぞ。いやもう見ただけでびっくりします。全く浮^{うき}城^{しろ}とはこのことです。金博士の実力は大したものですねえ」

と、前特使シモンは、約束の巨艦が金博士から届いたことを知

らせた。

「ふむ、そんなに大したものかのう。で、さつきお前のいった何もかも到着というのは、何を指すのか」

「ああそれは、巨艦ホノルル号も到着しましたし、それからもう一つ思いがけなく金博士も到着したことをお話しようと思ったのです」

「なに、金博士も来たか。わざわざ来てくれたとは、いやどうもまった全く嬉しいじゃないか。早速大歓迎の夜会を準備してくれ。燻製肉の方も特に念をいれて、よろしいところを皿に盛り上げて出すようにな」

といっているところへ、ハルの案内で、当の金博士がこのこ

部屋へ入ってきたものである。大統領は愕おどろいて、ナイトガウンの襟えりをかきあわせながら、ベッドの上から手をさしのべる。

「やあ、ようこそ、わしがルーズベルトです。このたびは、困難なる仕事を、わがアメリカのために引受けてくださって、ありがとうございます。また過日かじつ、金米きんべい会談を通じて、シモン及び余に対して示されたる数々の御厚意に深く感激しとる。さあ、まずそれへお掛け」

ルーズベルトの口調くちようは、だんだん例の横柄おうへいさを加えてくる。金博士は、別にそれを気にする様子もなく、安楽椅子あんらくいすの一つに、小さな身体を埋うずめた。

「この沖合おきあいまで、日本軍の目をかすめて持つてくるのに、ずい

ぶん骨を折ったよ。ホノルル号設計及び建造以上に、神経を使つたよ。まあようやくここまで持つてこられて、やれやれじゃ」

博士は、貰ったハバナ産の太い葉巻を口に啣くわえて、うまそうに煙をたてる。

「金博士の御心ごしんろう労を謝する。で、そのホノルル号は、果して不沈軍艦であるかどうかということについて、余は如何なる証しやうこ拠こ法ほうによつて、それを信用なし得るであらうか」

大統領は、例のねちねちした云い方で、金博士に追せまつた。そのとき金博士は言下げんかに応えた。

「わけなしさ、そんなことは。どうか君の手許にのこっている主力艦があれば、それを引張りだして、どこからでもいいから、わ

しの持つてきたあのホノルル号を砲撃でも爆撃でも雷撃らいげきでもや
つてみたまえ。それでもし沈むようなことがあつたら、わしは燻
製となつて、君の食卓の皿の上ののつてもよろしい。さあ、遠えんり
慮よなく、沖合へ主力艦をくりだしたまえ」

博士は、磐ばん石じやくの如き自信にみちていと見えた。

「大いによろしい」と大統領は口をとんがらかしていった。「で
は、余もこれから検分けんぶんのために出掛けよう。おいシモン。建けんか
艦かん委員を非常呼集ひじようこしゆうして、試験場へくりだすようにそういえ。
それから主力艦インディアナとマサチュセツツとを、すぐ沖合へ
出動させよ」

命令を出すと、大統領は仕度したくのため別室へ入った。やがて彼は、

黒のオーバーになかおれぼう中折帽、肩からぼうくうめん防空面の入った袋をかけて玄関に立ち現れた。

「金博士、どうぞ」

大統領は、玄関に横付になっているぴかぴか黒光りに光った自動車ゆびさを指して、そこに待っていた金博士にいった。二人は車上の人となった。

「オーケー。出発だ」

自動車は走り出した。と思つたら、とたんに、ぷすーつという音がして、がくんと横にかたむき、速度が落ちた。

「狙撃そげき？」

と、金博士はちよつと不意打ふいうちのおどろきを示した。しかし大統領

領は割合^{わりあい}におちついていた。そして冬^{とう}瓜^{がん}のような顔をしかめていった。

「どうも近頃のタイヤは、弱くて不愉快だ。なにしろ再^{さい}生^{せい}ゴムだからな」

5

新鋭戦艦マサチユセツツは大統領とその幕^{ばくり}僚^{りょう}、それに金博士を乗せると、沖合さして二十三ノットの速度でのりだしていっ

た。

「ルーズベルト君。この艦はもつと速度スピードが出るのじゃないかね」

「うむ、それはその何だ、むにやむにや。あああれか。あれが博士ひきの率きょういいてきた驚異軍艦ホノルル号か。うむ、すばらしい。全く浮かべるくろがねの城塞じょうさいじゃ」

「うふふん、そうでもないよ」

「いや、謙遜けんそんに及ばん。余は、ああいう世界一のものに対して、最も愛好力あいこうりよくが強い」

と、ルーズベルト大統領は艦橋かんきようから身体をのりださんばかりである。

「さあ、どうか御遠慮なく、あのホノルル号を砲撃せられよ」

「やってもいいのか。しかし……」

大統領が、訝^{いぶか}しげに博士の方を振りかえった。

「どうぞ御遠慮なく」

「でも、実^{じつ}弾^{だん}をうちこむと乗^の組^{りく}員^{みん}に死^し傷^{しょう}が出来るが、いい

だろうか。尤^もも死亡一人につき一万弗^{ドル}の割で出してもいいが……」

「弗は下がっているから、一万弗といっても大した金じゃないね。

とにかくそれは心配をしないでよろしい。早速砲撃でも何でも始

めたまえ。早くキンメル提^{てい}督^{とく}に命令したがいいじゃないか」

「キンメル提督？ ああ神よ、彼の上に冥^{めい}福^{ふく}あれ。おい、ヤー

ネル提督、砲^{ほう}撃^{げき}方^{かた}始め」

「オーケー、フランキー」

と、そこで両洋聯合艦隊司令官ヤーネル提督は、電話機をとつて、砲撃命令を下したのであつた。

戦艦マサチュセツツとインディアナの四十センチの巨砲、併せあわて二十門は、ぎりぎりぎょうかくと仰角をあげ、ぐるつと砲門の向きをかえたかと思うと、はるか五千メートルの沖にじつと静止している驚異軍艦ホノルル号の舷側げんそくに照準しょうじゆんを定めさだめた。

「照準よろしい」

報告が、ヤーネルの耳に届く。

「うん。撃て！」

提督は耳をおさえて云つた。

ごうぜん轟然と砲門は黒煙こくえんをぱつと吹き出して震動しんどうした。

甲板かんぱん

も艦橋も、壊されそうに鳴り響き、そしてぐらりと傾斜した。

「命中、五発！」

驚異軍艦のまわりには十五本の水柱が立った。のこりの五発は、たしかに命中したとある。しかし驚異軍艦は、かすかに檣をゆるがしているだけで、穴一つ明かないばかりか、砲弾の炸裂した様子もない。

「おい、本当か、五発命中というのは」

大統領が、狐にばかされたような顔でヤーネルを睨みつけた。

「た、たしかに五発命中です。ですが、どうもふしぎですなあ、炸裂しません」

といっているとき、驚異軍艦から左の方へ千メートルばかり放

れたところの海面か、どういふわけか、むくむくと盛りあがってきて、それは恰も^{あたか}、小さい爆雷^{ばくらい}が海中かなり深いところで爆発したような光景を呈^{てい}した。しかもそのむくむくは、勘定^{かんじよう}してみると、都合五つあつた。

「何だい、あれは」

大統領は怪訝^{けげん}な顔。

そこへ、さつきから置き忘れられたような金博士が、小さい身体をちよこちよこことのりだしできて、大統領に耳うちをした。

「ええつ、そ、そうか！」

大統領の愕^{おどろ}きは一方ではなかつた。

「ふーん、命中弾は、たちまち艦内を通り抜けて、艦底から海底

へ突入、そこで爆発したのだというのか。こいつは驚異じゃ」

「何ですって？」

と、ヤーネルが大統領の歎^{たんせい}声を聞きとがめ、

「ああ大統領閣下。金博士ごとき東洋人にたぶらかされてはなりません。第一おかしいではありませんか。命中したら必ず艦に穴が明くはず、穴が明けば必ずそこから海水が入って、たちまち轟^{ごう}沈^{うちんないしげきちん}及至撃沈となるはず。ですから、あんなに嚴^{げん}然^{ぜん}としているはずはありませんぞ」

「わっはっはっ」

金博士が、あたり憚^{はば}らぬ^か大声で笑い出した。

「これ金博士。あなたは司令官を侮^{ぶじよく}辱^{じよく}なさるか」

「わっはっはっ、ヤーネル君。さつき君は、たしかに五弾命中とみずか
自らいったではないか。それにも拘らず、今さら一弾も命中せざる
ごとくというのは何事だ。それとも、たった五千メートルの距離
から、静止^{せいし}せる巨艦を射撃して、二十門の砲手が、悉く中^{ことごと}り外^{あた}れ
たとでも仰^{おつしや}有るのかね。なんという拙劣な砲手ども揃いじやろ
う」

「ああ、うーむ、それは……」

ヤーネルの赤い赭^{あか}い顔が、急にカンバスの如く白くなった。

金博士は、それ見ろといわんばかりに、提督の顔を尻目に見て、

「さあ、ルーズベルト君、ぐずぐずしては、また鋭敏^{えいびん}なる

日本空軍に発見される虞^{おそ}れあり。さあさあ次の砲弾を撃ちこむな

り、それとも爆撃でも雷撃でも、何でもさっさと早くやつたりや
つたり」

と、金博士は只一人なかなか機嫌がよろしく見えた。

大統領は、眼鏡を掌の中に握り潰すと、居ても立ってもいられ
ないという顔付で、

「こら、航空隊出動せよ。爆撃をやれ、雷撃もやれ。早くせんか」
と呶鳴りたてた。

さあたいへん。大統領の激怒である。ぐずぐずしては、後
の崇りの程もおそろしと、旗艦マサチュセツツから発せられる総
爆撃雷撃の命令！

と、忽ち近づく飛行機の爆音、来たなと思う間もなく西空は

夥おびただしい爆撃機の翼よくが重り合つて真暗まっくらになった。それが驚異軍艦の上まで来ると、袋の底が破れてその穴から黒豆くろまめがぼろぼろ落ちるような工合ぐあいに、幾百幾千という爆弾がばら撒まかれた。

と、忽ち起る爆発音と大水柱と大きなうねりとの交響こうきやう樂がく！
巨艦きよかんの姿は、水柱の蔭に全く見えなくなつてしまった。

こんどこそは沈んだらしいと思つていると、間もなく水柱が、ざざーざつと海面に落ちこぼれると、あーら不思議、金博士の驚異軍艦ホノルル号の厳然たる姿が、神のごとくはつきり浮び出たではないか。

「ああつ、ちやんとしている……」

嘆息たんそくと畏敬いけいの聲が同時に起る。

「三十八弾命中！」

と、空中からの報告が届いたのは、このときであつた。

「なんだ、三十八弾命中？　しかし、ホノルル号は顛覆てんぷくもしないでちゃんと浮いているぞ」

と、大統領の嘆声たんせい。そのとき金博士が傍そばへ近づいて、ホノルル号からすこし放れた海面において新たにばかりと盛り上る大きな泡あわをさして、何やらいつて、ふふふと笑つた。大統領は、蒼腿あおぎめた長い顔をしきりに縦たてにふつて肯うなずく。

「ふーん、三十八弾、いずれも甲板から艦底に通じ抜けたか。しかも穴一つ明かず……。これは驚異じや。ハワイ海戦の前に、これを知つて居たらなあ。ちえつ、遅かつた」

と、大統領は、かぶっていた帽子を手にとって、両手でびりびりと引き破った。

「雷撃機出動です」

ヤーネルが、蚊かのような細い声でいった。

しかし大統領は、もう雷撃にはなんの興味をもっていなかった。何百本の空中魚雷をうちこもうと、到底とうていあの驚異軍艦を撃沈することは出来ない。今や彼の灼やけつくような好奇心は、かくも不思議な奇蹟を見せる驚異軍艦の構造の謎の只一点に集中されていたのであった。

「見せてくれ、あの驚異軍艦の中を！ わしは直すぐ、あれを真似して百隻せきばかりこしらえるんだ」

大統領は、あえぎながら、金博士の胸むなぐら倉をとつて哀訴あいそした。
「御覧になれば、なんだこんなものかと思われるですよ。はははは」

と、金博士は謙遜とも皮肉ひにくとも分らない笑い方をして、大統領をはじめ、建艦委員たちを案内して、驚異軍艦ホノルル号についていった。

艦^{ふね}には、ふしぎにも、水兵一人居らなかつた。そしてぷんぷんとゴムくさかつた。

「一言にしていえば、つまりこの艦は、艦^{かんたい}体を厚いゴムで包んだものと思えばよろしい」

と、博士はひどく気のなさそうな声でもって説明を始めた。

「しかし本当は、もつと複雑な構造をもっているんだ。今それをお目にかけてよう。さあ、両^{りょうわき}傍へ分れてください」

そういうと、金博士は車のついた大きな電気メスをもちだして、甲板^{かんばん}に当てた。すると甲板は火花を散らし、黒い煙をたてながら、まるで庖^{ほうちよう}丁でカステラを切るように剪^きれた。博士はメスを置いて、こんどは高压ブラストで、甲板の破片を海中へ吹きと

ばした。すると甲板の大きく切られた断面が人々の目の前に現れた。

「これ御覧。すてきに厚い さいりようしつ 最良質のゴムの蒲団 ふとん みたいなものじゃ。爆弾が上から落ちる。するとゴムの蒲団にもぐる。その間に爆弾の方向が鋼鉄 こうてつ の艦体に平行に曲る。そしてそのまま走るから、鋼鉄の艦体の外側をぐるつと廻つて艦底に出て、そこでゴム底を突き破つて、爆弾は水中へどぼんと通り抜ける。な、分るでしょうがな」

金博士は、大統領の顔を見る。大統領は大きく うなず 肯き、傍にいる けんかん 建艦委員の誰かの腕をつかんでゆすぶり、

「おい、君たちにも分るだろうな。よく覚えておくんだぞ。後で

このとおり作るのだから……」

「はい、大統領閣下」

「そこでこの爆弾の通過時間の長さじやが、もちろん時限以内のすこぶる短時間で艦外へ抜け出るようになってゐること、それからこのゴムは爆弾で初めに穴は明^あくが、爆弾が通り抜けると直ちに収^{しゅう}縮^{しゆく}して穴をふさぐから水を吸い込む余裕のないこと、この二点についてわしはちよつと苦心をしたよ」

博士は、かすかに溜^{ため}息^{いき}をついた。大統領閣下は、嵐のような長^{ちよう}大^{たい}息^{そく}をした。

「舷^{げん}側^{そく}を狙う砲弾や魚雷も、同じことに、ゴム蒲団の中でぐるつと方向をかえて、鋼鉄の艦体の外をぐるつと廻つて、艦底から

海底へ落ちる。今舷側を切つて見せてやるよ」

おどろいた構造の軍艦である。瞠^{どうもく}目するアメリカ人を尻目に、博士は、こんどは電気メスをとつて、舷側をぴちぴちごしごしと切り始めた。

舷側は、張^{はり}板^{いた}が二つに割れるように見事に切れた。しかし、あまり切れすぎて、吃^{きつ}水^{すい}以下^さまで裂けてしまったものだから、待つていましたとばかり海水がどんどん艦内へ突入してくる有様だった。

「いや、そんなものに愕^{おどろ}かなくてもよろしい。これ、わしの大事な説明を聞くんだ、ルーズベルト君」

「そうだ。ここが重要な個所だ。建艦委員、よく見、よく聞け」

「これがすなわち、さつき話をしたように……」

と、博士の説明が始まったが、轟々たる浸水の音がとかく邪魔をしていけない。博士はそれにお構いなく喋りつづける。

一応の説明がすんだ。

大統領はもちろん、幕僚も建艦委員も共に金博士の智力の下に慍伏した感があつた。

「うむ、大したものだ。これを真似て、早速百隻の不沈軍艦をつくれば、日本海軍に太刀打出来ないこともあるまい」

「どうだ、気に入ったかね、ルーズ君」

「いや、大気に入るだ。余は金博士を今日只今、名誉大統領に推薦することを全世界に宣言する」

「大きなことをいうな」

「そして金博士に贈るに、ナイアガラ瀑布一帯の……いや、瀑布のように水が入ってくるわい。おや、艦^{ふね}がひどく傾いて沈^{ちんか}下してきたが、まさかこの不沈軍艦が沈むのではあるまいな」

「この見本軍艦の用もすんだから、わしはもうこの辺で沈めて置こうと思うのじゃ。さあルーズベルト君。ぐずぐずしていると、艦^{ふね}もろとも沈んでしまうよ。いそいで本艦を退去したまえ」

「え、それはたいへん。おい急ぎ引揚げろ。して、金博士、君は」

「わしのことは心配するな。艦^{かんさいき}載機^{さいき}にのって引揚げろ。すつかり自動式のこのホノルル号に、水兵一人乗っていないから、わしが引揚げさえすれば、それでよいのじゃ。さらば、さらば」

7

大統領は命からがら沈みつつある不沈軍艦ホノルル号を退艦した。

後がワシントンに帰ってきたときは、出かけるときとはちがつて、大した上機嫌であつた。

「さあ、余は百隻の不沈軍艦を、これから一年間のうちに所有することになるぞ。早速建艦命令書を書くことにしよう。

おおヤーネルか、すばらしいじゃないか。再生のわが不沈艦隊は……」

「しかし……」とヤーネルは、不審ふしんの様子で、大統領のよろこぶ顔を見上げていう。

「不沈軍艦建造案は、たいへんよろしいですが、大統領閣下、それに使うゴムはどこから手に入れるのでございましょうか」

「なにゴム？ ゴムは蘭印らんいんマレイから……いや失敗しまった」

とたんに大統領は、蒼白そうはくになって、椅子の上にのびてしまっ

た。一体どうしたというのであろう。壁間へきかんには、塗りがえられ

た旧蘭印きゆうらんいん、旧マレイの地図が、夕陽ゆうひを浴びて赤く輝いていた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1942（昭和17）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

不沈軍艦の見本

——金博士シリーズ・10——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>